

令和元年度 第4回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和2年2月12日（水）13時30分～15時00分
- 2 場 所 みんなの森 ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオ
- 3 出席者 柴橋市長、早川教育長、川島委員、足立委員、横山委員、武藤委員、伊藤委員
- 4 招聘者 加納 誠司 氏 （愛知教育大学 生活科教育講座 教授）
（岐阜市幼児教育推進プラン検討委員会 委員長）
真田 美恵子 氏（ベネッセ総合教育研究所 学び・生活研究室 主任研究員）
- 5 傍 聴 一般13名、報道関係者6名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議「幼児教育の今後の方向性と更なる充実に向けて」
 - ①事務局説明
 - ②招聘者説明
 - ③意見交換
- 7 議 事
(13時30分開会)

○原教育政策参与

それでは、只今から令和元年度第4回岐阜市総合教育会議を開会いたします。私は、教育委員会事務局教育政策参与の原と申します。宜しく願いいたします。

本日は、市長、教育長及び教育委員5名の構成員全員が出席されております。皆様、宜しく願いいたします。また、招聘者といたしまして、愛知教育大学 生活科教育講座 教授であり、今回、岐阜市幼児教育推進プラン検討委員会 委員長を務めていただいた加納誠司 様、ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員 真田美恵子 様の2名にご出席いただいております。また併せて、子ども未来部より関係職員の皆様にも出席をいただいております。

本日の会議は、公開で行います。ここで、資料の確認をさせていただきます。本日は、次第、席次表に加えまして、事務局説明資料、それから、招聘者説明資料として、加納様よりご説明いただく幼児教育推進プランリーフレット、真田様よりご説明いただく講演資料、以上をお配りしております。

ではこれより、次第に沿って進めてまいります。まず、市長よりご挨拶をいただきます。

○柴橋市長

皆様、こんにちは。本日は第4回の岐阜市総合教育会議ということで、お集りいただきありがとうございます。

本市は、こどもファーストを掲げながら、様々な課題に向き合っているわけですが、今日はその中の柱の1つであり、今年度より教育委員会で力を入れて取り組んでおります「幼児教育」につきまして、各委員の皆様方、そして、本日もご出席いただいた講師の皆様方から、貴重なご意見を賜りたいと思っております。

中でも、先ほどご紹介がありました、岐阜市幼児教育推進プランは、加納先生に委員長をお務めいただき、策定にご尽力いただいたものでございますが、このプランをもとに、これからどのように幼児教育を充実、発展させていくか、さらに、本市における幼児教育の今後の方向性ということも、今日は主要なテーマとしてご議論いただくというところがあります。

我が家も、幼児2人を含め子どもが3人おりますが、幼児期、三つ子の魂百までということを実感するところがございます。色々な経験あるいは友達との関係、遊び、こういったことを通じての子どもの変化を本当に感じますし、この幼少期に何を感じ取っていくかによって、その後の小学校、中学校、高校、大学、社会人と、地域の大事な財産である子どもたちがどう成長していくか、とても大きな影響力があるなど、自らも親として実感しているところであります。

私どもの幼児教育課では、今年度、幼保小の接続、家庭教育への支援といった実践研究を行っていますが、まさにこの家庭が担う幼児教育の視点を特に意識しながら、1年間進めてきたところでございます。

本日は、更なる幼児教育の充実に向けて、お二人の先生から貴重なお話をいただけることを楽しみにしておりますし、また、委員の皆様には、幼児教育を通じたこどもファーストの実現に向けて、活発な意見交換と、その取組みに向けたお力添えをいただければ、ありがたいと思っております。それでは、本日は最後まで、どうぞ宜しくお願いいたします。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、次第2、本日のテーマ「幼児教育の今後の方向性と更なる充実に向けて」に関する協議を進めさせていただきます。

まず、事務局より、今年度の幼児教育の取組みにつきまして、総括的な振り返りとしてご説明申し上げた後に、続いて、2名の招聘者から15分ずつ、話題提供となるご講演を賜りたいと思います。

それでは、まず事務局よりご説明させていただきます。資料、幼児教育課の1年目の取組みを振り返っての部分をご覧ください。幼児教育課は、オール岐阜を掲げてスタートしております。その幼児教育課の1年間の取組みを振り返ってまいりたいと思います。

幼児教育施策の柱は、3本ございます。1点目が、まず、幼小をつなぐ。子どもの成長に寄り添う教育環境を実現するために、幼児教育と小学校教育の接続・連携を図るといったものでございます。具体的には、幼保小の合同研修会、幼児教育コーディネーターの配置といったものでございます。

2点目の柱が、家庭教育を応援する。先ほど市長も触れられたものです。家庭での子どもの育ちを支えるために、子育てに役立つ情報を発信するなど、家庭教育を支援するというものでございます。具体的には、幼児教育セミナーの実施といったものになります。

3点目の柱が、実践研究を推進する。幼児教育の充実に資する、様々な実践が行われるための環境整備を図る、といったものでございます。具体的には、昨年10月ですが、黒野保育園におきまして、幼保小、また、大学、PTA、様々な方達に参加いただき、実践研修会を実施しております。

最後、一番下ですが、幼児教育プランの策定についても、触れさせていただきます。

まず、幼小をつなぐ、でございます。幼稚園や保育所に通うお子さんは、遊びの中で学びを繰り返し日々成長されておりますが、小学校に上がると、机に座り、教科書を使いながら、先生の授業を受けることとなります。これまでの学びの形からの変化に、子どもたちにもやはり戸惑いが見られます。これが俗に言う、小1ギャップとされるもので、そういったものを解消し、幼から小に円滑につないでいくことが、重要になってくると思っております。

そのために、幼保小の指導者が研修を受ける場として、この幼保小合同研修会が、実施されております。年3回実施し、幼児教育と小学校教育をつなぐというテーマのもと、岐阜聖徳学園大学 西川正晃 教授にご講演いただきました。また、その下ですが、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿について、ワークショップも2回、実施しております。西川教授の著書は、幼児教育、家庭教育部門の書籍売上においてランキング第1位となるなど、参加者にとっても非常に関心の高いお話を多くしていただきました。

次のページですが、その幼保小合同研修会のアンケート結果です。左側が理解度、右側が満足度になっておりますが、理解できた、おおむね理解できた、が100%と大変好評でした。参加した市内の小学校教員の感想として「とても分かりやすく、進学してくる子どもたちと会うのが、とても楽しみになりました。ぜひ10の視点を心にとめて、子どもたちと一緒に学んでいきたいと思いました。」というご意見をいただいております。

続いて、幼児教育コーディネーターの配置について、でございます。専門知識と豊富な実務経験を有する、幼児教育コーディネーターを配置いたしました。こちらは、島小、西郷小で校長を務めた後、退職された校長OBに担っていただいております。私立幼稚園・認定こども園37園の巡回訪問・支援とともに、その都度、園の環境、就学指導、特別支援教育に関する助言などを行っていただきました。私立幼稚園連合会の会長様からも「コーディネーターという外部の視点から様々な気づきを得る中で、幼稚園の取組み充実や改善につながっている。」という感謝の言葉をいただいております。

次に、2点目の柱、家庭教育の応援についてです。まず、幼児教育セミナーです。家庭教育の応援を目的に、家庭での子どもの育ちを支えるための情報を発信するセミナーで、楽しむ、学ぶ、知るといった3要素を念頭に、企画構成しております。

内容についてですが、第5回までが一般向け、第6～8回につきましては、公立幼稚園のPTA行事、私立幼稚園連合会PTAフォーラムでの講演になります。毎回ほぼ満員で、幼児を持つ親の関心が非常に高かったと感じております。

参加者アンケートです。延べ約1,350人がセミナーに参加し、98%の方が内容について、参考になる・どちらかという参考になると回答いただいております。また約8割の方に、複数回参加いただいております。リピーターの方が非常に多い、その点については大変喜ばしいことですが、岐阜市内で0歳児から5歳児の幼児をお持ちの保護者は、約18,000人おります。やはり今後は、いかにより多くの方に必要な情報を届け浸透させるか、といったことが、課題になってくると思っております。

次のページ、このセミナー内容の周知として、YouTubeの岐阜市公式チャンネルにセミナー動画をアップしております。第1回の高橋先生の講演から、第3回のボーク重子さんの講演までアップされております。資料中は、2月3日現在の数字ですが、先ほど確認した本日時点で、3,371人の方にご覧いただいております、今後も広く周知に努めていきたいと考えております。

続きまして、3点目の柱、実践研究の推進でございます。先ほど少しご説明いたしまし

たが、昨年10月24日、今日は園長先生にお越しいただいておりますが、黒野こども保育園にてご厚意で、実践研究会を実施させていただきました。内容としては、公開保育、実践発表、パネルディスカッションに加え、前文部科学省調査官 津金美智子 氏に講演いただきました。参加者は、当初120名を予定しておりましたが、予想以上の反響で約160名と、非常に様々な分野の方から多くの参加をいただき、盛況でございました。

こちらの実践研究会のアンケート結果は、左側がオリエンテーション・保育参観について、右側が黒野認定こども園の幼児教育及び小学校教育の説明といったことですが、ともに100%、とても良いもしくは良いという結果となっております。

パネルディスカッションは、記載の6名の方に、未来社会で求められる力と教育というテーマのもと、意見交換していただきました。川島委員と伊藤委員にも出席いただき、こちらも100%、とても良いもしくは良いと評価をいただいております。

次に、私ども公立幼稚園の拠点園としての機能強化といった点に、触れさせていただきます。今、認定こども園に関する調査研究、検討を始めております。公立幼稚園が認定こども園へ移行することに対する検討でございますが、幼稚園、保育所がそれぞれ培ってきた機能、強みを融合させ、乳幼児から小学校就学前までの一貫した教育、保育のあり方を追求してまいります。また、その検討にあたりましては、幼児教育や公立幼稚園を取り巻く環境の現状を考慮しながら、進めているところでございます。

次に、幼児教育推進プランの策定についてです。先ほど市長からも触れていただきましたが、教育委員会から委員会へ諮問を行い、これまで計4回、加納委員長を中心に、毎回時間ぎりぎりまで、非常に熱心な討論、議論をいただきました。

この結果につきましては、1月22日の教育委員会定例会にて答申をいただいた後、本日、この総合教育会議において報告させていただいております。今後、3月中に策定、公表の予定で進めております。

最後に、今後の展望といったことについてまとめてございます。3本の柱のうち、1点目の幼小をつなぐ、でございますが、幼児教育コーディネーターがアドバイザーとともに、巡回訪問の際に園内研修を実施することを考えております。元園長を務められた方がアドバイザーとなり、コーディネーターとともに巡回訪問することで、なかなか研修に参加できない幼稚園、保育園の先生のもとへ直接足を運び、園内研修を実施いたします。

2点目の家庭教育を応援する、についてですが、保護者や先生方の悩み等の相談に応じるキンダーカウンセラーを派遣し、より細やかな家庭教育を応援するといったものでござ

います。

3点目、実践研究を推進する、については、小学校接続期の実践研究の公開を支援することにより、幼小の接続に資する取組みの充実を図るものでございますが、これは、小学校で実践研修会を行うことを考えております。従来は、幼稚園で行っていましたが、幼保小接続の重要性という観点から、小学校においても実践研究の場を設けていくというものです。これら来年度の新たな取組みも含め、今回策定する、幼児教育推進プランの理念を具現化する施策を、今後、展開してまいります。事務局説明は、以上でございます。

それでは、続きまして、加納様よりご説明を宜しくお願いいたします。

○加納教授

皆さん、こんにちは。岐阜市幼児教育推進プラン検討委員会 委員長の加納です。研究者として13年目になります。大学卒業後、高校、小学校、中学校の教員を経験し、その後、研究者として中部学院大学で8年間、幼児教育の素晴らしさをみっちり諸先輩に教えていただきました。今回、このような機会をいただき、幼児教育に関する調査研究で論じられている「非認知能力」を育てる学びを、これから岐阜市でいかに実現していくか、その理念をつくるという使命を持って、この幼児教育推進プランを策定させていただきました。ここからは、座って説明させていただきます。

お手元にあります岐阜市幼児教育推進プラン、もしくはスライドをご覧になって、話を進めていきたいと思っております。

我々が、今年度議論し作成した、幼児教育推進プランの骨子、論点などを3ページに示しております。大切にしたい3つのこと、またそれを実現するための価値の共創に向けた3つのアプローチを中心に、述べさせていただきます。

まず、その根拠に至る背景、これからの時代に必要な資質、能力について、初めに4ページを見ていただきたいのですが、2000年にノーベル経済学賞を受賞した、ジェームズ・ジョセフ・ヘックマンの研究によりますと、幼児段階に教育を受けることの重要性が明らかになっておりますが、これはただ教育を受けることだけではなく、この時期に育む能力として非認知能力を育てることが大切であるとされています。つまり、その重要性とは、自分のことが好きと肯定的に捉えることができる自己肯定感の醸成であり、自己肯定感は、もともと子どもが当たり前のように持っているものであると思います。子どもが生活する社会の中で、自分の存在が有用であるという自己有用感、学ぶことの楽しさ、意欲などを

大人が価値づけてあげることの重要性が示された、と捉えることができます。

5ページに移り、非認知能力の育成が必要とされる背景として、子どもたちが生きていくこれからの社会はVUCAと表現されるように、不安や困難が浮き彫りになっていく時代と言われております。SDGsにおきましては、その取組みに見られるように、世界の環境を存続させるための開発目標等が示されているわけです。つまり、このような不安定な時代において、自分の生きる道を自分で判断し、自ら人生を切り開いていく力、つまり非認知能力の育成が、不可欠なのであります。

6ページでは、そんな未来の移り変わりを、岐阜市の概況で整理していきたいと思えます。既にご存じのように、人口が減少する中、高齢者の割合が増えていきます。また、子どもの数は減っていく一方、特に0、1、2歳という乳幼児段階での保育利用は、増加傾向にあることが分かります。

7ページ、これまでの社会の移り変わりを見ても、幼稚園、保育所、こども園等の幼児教育施設、保育施設の利用は不可欠であることが分かります。

8ページにおいても、幼稚園、保育所の先生の存在が、保護者にとって、子育てにおける重要な役割や情報源を担っていることが分かります。

そこで、9ページ、このような状況を鑑み、幼児教育施設・保育施設、家庭・保護者の連携だけではなく、地域、行政、民間等、全ての主体に幼児教育の重要性の発信の幅を広げるとともに、そこで培われた学び、育ちの価値が小学校、中学校、その先、子どもたちが将来生きていく社会において、その後の人生の礎となります。だからこそ、オール岐阜で一体となって幼児教育の推進に取り組んでいくことを目指す、幼児教育推進プランの基本的理念が構築されました。

10ページからは、幼児教育推進プランの骨組みである大切にしたい3つのこと、その価値について述べさせていただきます。

まず、最初の出発点は、幼児期の子どもを理解することです。先ほど、市長からこどもファーストという言葉がありましたが、大人の都合で、あるいは大人の人生の枠組みで、子どもの生活や生き方を捉えるのではなく、子ども自身が、自らの力で人生の主演になれるよう、子どもの存在を大人が受け止め、理解し、体験を通して培われるであろう様々な経験を価値づけ、それに応じた関わり、援助をしていくことが大切です。

子ども理解の柱は、自分が周囲の大人に認められていて、安心して生活し、力を発揮できる、その安心感が、子どもと大人の信頼関係をつなげていくと考えております。

11ページです。子どもの権利条約から明らかになったことは、子ども自身が自分の人生の主演であり、自分を中心として、自分自身が異なる様々な他者と良好な関係を築きながら、自分の人生を生きていくという当然の権利に気づき、そのことを大人が理解、価値づけていくことです。

そんな幼児期の子どもにとって生きるということは何なのか、その行動様式を中心は、遊びであります。皆さんは、遊びという言葉聞いて、どんなイメージをお持ちでしょうか。とかく遊びというと、勉強や努力を弊害するように捉えられることもあります。

私の経験を話して恐縮ですが、初めて小学校1年生を担当したとき、その前年に6年生を担当していたからでしょうか、「皆さん1年生になったんだから、いつまでも遊んでいちゃだめだよ」「お勉強をしっかりとってくださいね」「そんな悪いことばかりしていると幼稚園に返すよ」など、何て間違ったことを私は言ってしまったんだろう、と今でも思っています。

私はそれ以来、遊びの持つ価値に気づき、遊びは決してレベルが低いものでも、学びや育ちと切り離すものでもないと考えております。そして今回、我々が大切にすべき2つ目の柱として、遊びを価値づけること、遊びの中の学びについて提唱しております。

遊びの中には、子どもたちの興味、関心を引きつける要素が多様に広がっております。そんな中で、議論に一番時間を割いたのが、この11ページ右下に示させていただいた、この図であります。この植物を木として、仮に学びの木として名づけましょう。その下には、遊びという根が広がり、その素地を成しているのです。この遊びをしっかりと価値づけてあげることが、学びの木全体をどンドン、どンドン広げていくということになると思います。その広がりには例えば、非認知能力であったり、あるいは体を動かす体力の向上であったり、その上に示させていただいた認知能力、つまりいろんなことを知っていることだったりするわけです。そして、それらの成長はやはり、自分のやりたいことや達成させたい思い、願い、それらに裏打ちされた遊びがあってこそ可能なことなのです。

非認知能力の重要性を先ほどお話させていただきましたが、大体、学習指導要領の改訂の変遷の歴史は、認知か非認知かという争いの歴史とも言えます。今回、我々が主張したいことは、やはり認知の根底に非認知というものがあり、この非認知をしっかりと位置づけることによって、認知につながっていくということ。つまり、遊びが大好きなことで、学びも大好きになるということです。

12ページに入ってくださいまして、そんな中、今改訂の幼稚園教育要領、保育所保育

指針の中には、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿というものが示されました。この10の姿は、卒園までにこの力を身につけなくてはならないという、いわゆる到達目標ではなく、子どもがそこに向かっていく、方向目標であるということです。

子どもたちは、それらを遊びの中で、体全身を使って表現していくということが大事だと思います。目一杯体を動かして遊ぶことで、子どもたちの心はおのずと動かされ、表情豊かに遊びを表現していきます。そこから、自分のやりたい遊びを最後まで遊び抜く自立心であったり、1人で遊ぶと楽しい、でも友達と遊ぶともっと楽しいという協同性であったり、何で水を入れるとこんな砂山は固くなるのか不思議だな、ぴかぴかの泥だんごがつくれるかな、という自然が与えてくれる学び、さらには思考力の芽生えなど、10の姿に向かっていく姿勢、意欲が方向づけられていくと考えます。そして、ゴールではなく、方向目標なので、小学校、中学校へとさらにつなげていくということが大切になってきます。

13ページです。3つ目の柱が、発達の多様性になります。これは、子どもが育つスピードや幅は一定ではない、と理解することが大切です。子どもは一人ひとり、人格を持った固有な存在であり、周りと比べることなく、かけがえのないたった1人の存在として、大人が受け止め、認めてあげることが大切であると思います。命を持って存在したときから、今ある子どもの行動、姿を否定することなく、学ぶこと、成長することを実感させるような幼児期を過ごさせてあげることが、大人の務めなのです。つまり、我々が主張する大切にしたい3つの価値とは、子ども理解に始まり、次に、遊びの価値、子どもが成長するための幅や進度を理解する、そして最後は、やはり子どもそのものを受容するという、プランの骨子につながっていきます。そんな社会、インクルーシブな教育を実現することが、幼児教育推進プランの柱の根源に位置づいていることをご理解ください。

14ページからは、この幼児教育推進プランの理念を実現する、価値の共創に向けた3つのアプローチについて、述べさせていただきます。

まずは、幼児期に培った学び、育ちを途切れることなく、義務教育の入口、小学校につながる縦の視点です。子どもの学び、育ちを接続するためには、小学校の先生と幼稚園・保育所の先生の連携が、不可欠です。私の研究フィールドは、学校教育、授業研究をベースにしており、岐阜市の教育には、研究者として駆け出しの頃から大変お世話になっております。岐阜市の質の高い学校教育、先生方の指導力の高さは、重々承知しております。

そこに、幼児教育で価値づけられた自己肯定感や学ぶ意欲に示されるような非認知能力の理解、幼児教育期からのスタートカリキュラム実施などが加われば、さらにその質の向

上が実現できるのではないかと信じてやまないであります。

幼児教育推進プランの発信は、むしろこうした幼児教育の規格の外にいる人に向けた理念、考え方の発信といっても過言ではないのかな、と感じている次第です。小学校のみならず、中学校、高等教育、社会へとつなげていくことが我々の使命です。換言すれば、幼児のきらきらしたあの表情、あの表情を小学校、中学校につなげ、豊かな人生を送ることを、先生、身の回りの大人、ひいては社会がサポートするということです。

15ページに示させていただいたのが、横の視点になります。幼児期に育つ、子どもの世界の幅を広げて捉えることです。その教育機関は幼稚園だけにあらず、保育所、こども園等々、子どもが育つ全ての空間、社会にアプローチしていきます。その幅は、子どもが最も生活する場所である、家庭も含まれています。家庭教育の応援、サポートは、幼児教育推進プランの守備範囲を示す、大きな指針と言えます。

その根拠として、16ページ、子どもの自己肯定感と同様、そこに向き合う大人の子育てにおける自己肯定感も必要であります。自己肯定感は、向き合う人とのやり取りの中で、ますます高まっていくのです。ですから、大人の自己肯定感も高める、いわば子育てする親育ちまでサポートしていくのが、この幼児教育推進プランの特徴と言えます。オール岐阜の幼児教育推進プランは、それら社会を巻き込んで、子どものみならず、子どもと関わっていく大人自身もこのまちで子どもを育て、そして子どもとともに学び育つことまでを支える取組みと言えます。

3つ目のアプローチが、17ページになります。ここまで我々が描いた幼児教育推進プランを、実践研究のベースに乗せることを示しています。先ほど、原教育政策参与から説明がありましたが、公開保育、授業研究など、子どもの姿を通してオール岐阜で学び合っていくことが大事なのではないでしょうか。

18ページ、これら価値の共創に向けた3つのアプローチ、それぞれにおける具体的な取組みを整理させていただきました。

19ページには、このプランの策定経過と関わっていただいた委員を載せております。私が申し上げるのも大変恐縮ですが、かなり個性の強い、専門性を持った委員が集まったと自負しております。お隣の真田さんもそのお一人だと思っておりますが、委員の皆さんは自己肯定感がとても高く、言いたいことを存分に述べることができました。わいわいがやがややりながらも、最後、子どもたちの笑顔のためには、やはり我々委員が、笑顔でなくてはいけない、ということを感じかされたように思います。

以上であります。後ほど忌憚のないご意見、至らぬ点を教えていただければ幸いです。
ご清聴ありがとうございました。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは、続きまして、真田様よりご説明を宜しく願います。

○真田主任研究員

ベネッセ教育総合研究所の真田と申します。今年度、幼児教育推進プラン検討委員会の委員を務めさせていただきました。本日は、お時間をいただきましてありがとうございます。乳幼児を取り巻く環境変化と児童期以降につながる力というテーマで、少しお話しさせていただきます。

このテーマは、今年度、私どもの研究所メンバー3名が、岐阜市の子育てフォーラムや幼児教育セミナーなどで講演させていただいた内容を抜粋したものになります。この先、座って説明させていただきます。失礼いたします。また一部、投影のみとさせていただいているスライドもございますので、その点、ご了承いただければと存じます。

今日のお話は大きく2点です。1つ目が、乳幼児の親子を取り巻く環境と子育ての変化、2つ目が、学びに向かう力と家庭教育との関わりです。この学びに向かう力というのが、先ほどよりご説明があります、いわゆる非認知的スキルと言われているもので、児童期以降の学力につながる大事な幼児期の育ちであると考えられております。

こちらは、今からおよそ70年前、昭和20年代の子育ての様子です。第一次ベビーブームの時代でもあり、子どもの数が今よりずっと多かった時代です。子どもが地域で育っていた時代、そんな印象を受けます。

そして次が、それから半世紀以上がたった2000年以降に、ベネッセが行った調査の結果です。0歳から2歳の第1子を持つ母親に、地域での子どもを通じた人付き合いを尋ねたところ、上から3つ目にございますが、子育ての悩みを相談できる人が一人もいないと答えた割合は27.6%、およそ4人に1人でした。この数十年間で、子育てを取り巻く環境は、大きく様変わりしております。

ここには挙げておりませんが、自分の子どもを持つまで、赤ちゃんに触れたことがないという母親も半数程度いることが分かっております。子どもの発達を間近で見たことがな

いまま親になり、さらに地域での付き合いが希薄化する中、近くに相談したり頼ったりできる人も持ちにくい、そうした状況で子育てをしている今どきの子育ての様子が浮かび上がります。

さらに、仕事を持つ母親が増える中、子どもの成育環境はどう変化しているのでしょうか。こちらは、首都圏の調査結果になりますが、幼児が園に行くために家を出てから、家に帰ってくるまでの時間を表したものです。1995年から2015年まで5年ごとの調査結果を示しておりますが、幼稚園児、保育園児ともに、年々家を出る時間は早くなって、家に帰る時間は遅くなる傾向があります。働く母親が増え、保育園に通う子どもが増えているだけでなく、幼稚園でも預かり保育や降園後の園庭開放、また、保育園でも延長保育が充実していることなどを背景にして、子どもが家の外、園で過ごす時間が長くなっています。幼児の生活、言い換えれば、幼児の生育環境において、幼稚園、保育園、認定こども園といった園が果たす役割が大きくなっていると言えます。

次に、こちらは幼児の母親に、子育てやしつけの情報源として当てはまるものを全て選んでもらった結果です。人やインターネット、書籍など様々ございますが、この中で、園の先生というのは、幼稚園児の母親の回答では、人に関する項目の中で2位、保育園児の母親では、インターネットや書籍も含めた22項目中、1位でした。園は、子どもの生活の中で存在感を増しているだけでなく、親にとっても子育ての拠り所となっていることが分かります。

幼児の生活は、今、家庭と園が中心になってきているという実態がございます。こうした実態を踏まえて、家庭で、園で、また、希薄化していると考えられる地域で、子どもがどういう経験をすることが、あるいは、大人が子どもにどういう関わりをすることが、子どもの発達にとって大切なのかについて、少し考えていきたいと思えます。

ここまで、子どもが育つ環境の過去からの変化等を見てきました。教育を考えるときは、過去からの変化だけでなく、これから先の未来がどうなるかという視点を持つことも必要です。今の子どもたちの多くは、22世紀を生きることが予測されています。そうした未来の社会はどうなるのか。私たち大人にとっては、少し遠い未来の関係ない話であると思われるような、アジアの時代からアフリカの時代へのシフト、人工知能と人間の能力の逆転、経済大国の地位から陥落する日本、このような環境を、子どもたちはまさに自分事としてこれから直面していくということが予測されています。

こうした変動の時代を生きていく力を身につけられるよう、教育改革が行われておりま

す。もう皆様ご存じかと思いますが、子どもたちにこれから求められる力として、幼児期から高校生まで一貫して、子どもに育成すべき資質、能力の3つの柱がつくられております。知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、そして、それらを使ってどのように社会や世界と関わり、より良く人生を生きるかにつながる学びに向かう力・人間性です。この学びに向かう力というのが、先ほど加納先生からもご説明がありました非認知的スキル、非認知能力と言われるもので、人生をより良く生きるために大切な力です。具体的には、粘り強さや行動、感情のコントロール、協調性などの力を指しております。

私たちの研究所では、小学校以降の学習につながる幼児期の育ち・学びとして生活習慣、文字・数・思考、そして学びに向かう力、これらが子どもの発達とともにどのように育っていくのかということの研究しております。私たちの研究所では、この学びに向かう力を、5つのカテゴリーに分類しております。好奇心、協調性、頑張る力、自己抑制、自己主張です。

少し細かい図になりますが、14ページに示しておりますのは、子どもの年齢、発達とともに、どの力がどの力に影響しているかというのを簡単なモデルにして示したものです。例えば、生活習慣が3、4歳の年少のときに高く身についている子どもほど、その右側に矢印が出ておりますように、翌年、年中児期でも生活習慣が高く身についているという傾向があります。これは、横に向かう矢印ですが、それが強く出るということは当然の結果かと思えます。

しかし、今回私たちが注目したのは、斜めに向かって伸びている矢印です。①と書いているところになりますが、例えば、年少の時期に生活習慣が高く身についているグループの子どもは、年中の時期になると学びに向かう力が高くなるという傾向が見られました。また同様に、年中の時期に学びに向かう力、中でも協調性、友達とのやりとり、そういった力が高い子どもは、②の矢印になりますが、年長になると言葉の力が高くなるという発達の波及効果が見られました。そして、年長の時期に、言葉や頑張る力、自分の気持ちをコントロールするような自己抑制が身についている子どもは、小学校1年生になると、自ら進んで学習するような態度も身についているという結果が見られました。入学準備というと、とにかく文字や数がいかにできているかというところに注目が集まりがちですが、言葉や頑張る力、生活習慣も小学校以降の学習態度と関連していることが分かりました。

さらに、小学校1年生を超えて4年生までの成長プロセスを見ていきたいと思えます。幼児期に、物事に諦めずに挑戦するといった頑張る力が高い子どもほど、小学校低学年で大

人に言われなくても、自分から進んで勉強するなどの学習態度が高く身につけていることが分かりました。また、小学校低学年で学習態度や頑張る力が身につけている子どもは、小学校4年生で言葉のスキルや思考力が高くなるということも明らかになっています。

そうすると、幼児期の頑張る力がどのように身につくかということが気になるところでございますが、ここについても調査をしております。私どもの調査では、親が子どもの意欲を尊重したり、あるいは子どもが自分で考えられるように促すといった関わりを持つことが、大切だと分かりました。これから子どもが生きていく時代は、先ほどご説明があったように、未知の社会、変化が大きく、スピードも速い、そうした激動の時代になると言われています。そうした何が起こるか分からない、でも確実に変化するであろう社会を生きていく子どもたちが環境に適応して、創造的にかつ主体的に行動できるような資質を育んでいくためにも、子ども一人ひとりが持つ良さや力を最大限に引き出せるような、そんな大人の関わりが重要であると考えられます。

幼児期の頑張る力のほかに、言葉の力も小学校に入った後の学習態度につながるとお話をしました。言葉の力を高めるにはどうすればいいか、私たちの調査では、例えば、言葉遊びをすとか、一緒に絵本を読む、または読み聞かせ、あとは、子供と一緒に話し合う、こうした経験も大事であるということが分かりました。ご家庭でできることとして、絵本や本の読み聞かせについて、最後に少し触れたいと思います。

18ページのスライドは、岐阜市の幼児の保護者を対象に行った共同調査の結果になりますが、左のグラフが、日頃どれぐらいの頻度で、子どもに読み聞かせをしているかという結果になります。およそ3割の家庭で、殆ど毎日読み聞かせをしているというのが、岐阜市の実態でした。週3日以上を、私たちが別に行っている全国調査と比較しますと、特に岐阜市では、保育園児の家庭において、全国調査よりも週3日以上読み聞かせをするという比率が、10ポイントほど高い傾向が見られました。同様に、1週間の中で読んだ絵本の数についても、岐阜市は全国調査よりも多い傾向が見られました。読み聞かせは、親子のコミュニケーションとして大事な時間であり、忙しい中でも、そうした時間を確保している家庭が多いことがうかがえます。

ここまで、家庭の子育ての話をしてまいりました。最初に触れましたが、今の子どもたちの生活は、家庭と園が大きな存在を占めており、そのことを考えたとき、一方の園ではどういった経験が大切なのでしょう。

私たちの調査では、園での遊び込む経験が大事である、ということが分かっております。

遊びに没頭する、入り込むイメージとして、遊び込むと表現しています。遊び込む経験が年長児期に多かった子どもほど、協調性や頑張る力、自己主張や気持ちをコントロールする力などの学びに向かう力、非認知的スキルが高いことが分かりました。

子どもは、遊び込む過程で、頑張る力や、自分がやりたいことを伝える自己主張の力、友達と意見が衝突したときに気持ちを立て直す自己抑制の力などが身についたりするので、と考えられます。そして、こうした力があれば、小学校以降、与えられた課題であっても、前向きに好奇心を持って取り組むことにつながると考えられますし、そうした力が、生涯に亘って様々な困難に立ち向かい、解決していく能力にもつながっていくのではないかと考えております。

最後になりますが、このスライドは、岐阜市の幼児の保護者を対象に、この1年における、園での子どもの遊び込む経験について、母親に尋ねた調査の結果になります。自分で好きな遊びを選んでも、好きなことや得意なことを生かして遊ぶ、挑戦的な活動に取り組む、見通しを持って遊びに取り組む、これら4項目のうち、挑戦的な活動に取り組む、見通しを持って遊びに取り組む、この2項目については、1、2割程度「なかった」という回答があったものの、全体的には総じて、非常に高い傾向が見られました。

家庭における子育ての支援、園における遊び込む経験の充実などを含めた、保育の質の向上、そして、地域における子育て支援、三位一体で子どもがより良く育つ環境が、岐阜市においてさらに充実していくことを願っております。

以上でございます。ご清聴いただきありがとうございます。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは、只今の説明を踏まえまして、これより出席者の皆様お一人ずつから、ご意見を賜りたいと思います。

先ほど、事務局から説明いたしました、幼児教育の推進に係るこれまでの取り組みや今後の方向性に対するご意見のほか、幼児教育推進プランに基づいた、新たな施策の提言などもいただければと思っております。様々な観点より、幅広いご示唆を頂戴できればと思います。ご意見のある方は、挙手をお願いいたします。それでは、まず教育長、宜しくお願いいたします。

○早川教育長

ありがとうございました。お二人の先生のご提言、とても参考になりました。

加納先生を中心につくっていただいた、私どもの幼児教育推進プランは、先生のご説明のとおり、非常にストーリーがあるものだというのを、改めて認識しました。ただ示すだけではなく、そのストーリー性をいかに多くの皆様に分かっていただくか、そのための方策も色々あると思います。例えば、動画配信あるいは活字にして、より多くの市民の皆様にお伝えできるようになると良いと思いました。

また、真田先生からのお話で、岐阜市の幼児期の保護者の意識がやや高いということについては、大変心強いお話であったと思います。

今年1年、取組みを進める中で、講演のリピーターが多いことは大変嬉しいことでしたが、未だ届いていない人に、今後どう届けていくのかということが非常に重要であると、かねてより認識しておりました。子どもに対する接し方があり、育て方があり、それを知っていることによって、より良い家庭教育や幼児教育、ひいては小学校、中学校期の教育につながっていくのだということ、より多くの人にどう届かせていくのか、この1年間、課題として取り組んでまいりましたが、今後は、今教えていただいたようなことを小学校の校長や、保育園、幼稚園、こども園の園長先生方にお伝えし、そこから更に、より多くの保護者の皆様へお話ししていただくことを、組織的に行っていく必要があるなと感じました。

また毎回、講演会の後、参加している保護者の方からの質問が非常に多いことに驚きます。やはり、先ほどの資料にもあったように、相談する相手がいないということに対しての渴望感というか、そういう場所を求めている人たちが多いということ、私も実感しています。ですから、今後は、講演会をやった後、講演者に伺うだけでなく、教育委員会や子ども未来部のスタッフが、そういうところでブースを設けて受け入れ、子育ての悩みやそれに対する助言を行うなど、相談へのいざないもあつたほうが良いなということ、今日のデータを見て思いました。学び続ける保護者の入口として、幼児教育課の存在価値も高めていかなければならないということ、改めてお二人のお話から感じた次第です。

それから、もう一つは、接続の受け手の小学校の有様として、決められたカリキュラムがあり、また集団生活が前提となってしまうています。そこへ無理やり子どもたちを順応させようとする努力が強すぎるのは、やはり好ましくないと思います。生活科などは特に、そういった側面を変化させるチャンスだと思いますが、小学校の先生方に大いに幼児教育のあり方を学んでいただいて、その良さを引き続きつなげていくということについての必

要性も強く感じたところです。

幼稚園・保育園の先生方の研修会をやったところ、大変学ぶ意欲が強いことについて感心いたしました。その一方で、なかなか学ぶ機会が無いのだろうなということも思うわけです。多様な幼児教育が、我々岐阜市の強みだと思っておりますし、また教育委員会がそれらの幼稚園、保育園の先生方の研修の機会をきちんと確保していくことが重要な責務であると、今日、お二人の先生のお話を伺って感じた次第です。以上でございます。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、川島委員、宜しくお願いいたします。

○川島委員

教育委員の川島です。このプランについては、教育委員会の定例会の中で事前にお示しいただき、議論、討論してまいりました。大変な力作、労作で、感謝しております。

岐阜市の理念、こどもファーストをいかに実現するかという中で、一番最初の指針がこのプランになります。2ページにもあるとおりで、これは2020年から向こう10年間の岐阜市の幼児教育の方向性を定める、非常に重要なプランと位置づけられており、このプランを具体的に実行していく中で、こどもファーストの実現が図られていく、こういう流れかと思えます。

ですから、非常に重要な位置づけという中で、実はちょっと驚いた部分があり、遊びの大切さ、遊びの中の学びというものが堂々と前面に肯定されたということについて、私自身これをととても面白く感じていますし、子育てをする親にとっては、大変励みになると思っております。

また、それ以外の中身についても、基点にしている策を幾つか挙げると、まず、幼小をつなぐという中で、幼児教育関係者のコミュニティ・スクールへの参加について、非常に期待しています。岐阜市の教育の中で、このコミュニティ・スクールというのは、非常に重要な位置づけになっていて、小中学校には必ずコミュニティ・スクールがあります。学校と地域をつなぎながら、地域の教育力を学校教育の現場に引き出していき、あるいは活用させていただくということを重視している中で、幼児教育についてもコミュニティ・スクールの中に取り込んでいくという試みは、非常に良いご指摘でありますし、今後これが大きな目玉の課題、施策になっていくのではないかと期待しております。私自身、教育委

員としても、この観点は非常に大事にしていきたいと思っているところです。

もう一点、市立幼稚園を拠点園へということで、機能強化が施策の中で謳われていますが、やはり具体的に施策に落とししていかなければと思います。その中で、やはり市立幼稚園が研究であったり、実践であったりを最前線で担いながら、各幼稚園、保育所にも水平展開していくということが今後求められていきますし、幼保小の連携に関しても、市立幼稚園の中で検討、実践されたことが、どんどん良い形で展開されていくことを期待しています。

最後に、先ほど、これは10年の体系を示したプランだという話をしたわけですが、やはり一番問題になってくるのは、どのように見える形で施策が展開され、理念として掲げているこどもファーストが実現されていっているのか、進捗はどうか、私は企業視点なのでどうしてもこういう言い方になってしまいますが、成果をいかに見える形で示していくかということが、この10年で問われていくと思います。どう見える化していくか、ということ、やはり重視しながらやっていきたいと思っています。というのも、やはり本当にこのプランを実施した成果が、世の中に良い影響を生み出し、このプランをやって良かったという評価を得るのは、10年後だと思うのです。実際にこのプログラムを受けて育った子どもたちが、10年後どう育っていくのか、あるいは、その子どもたちを抱えるご家庭が10年後にどういう形で成果を実感できるのか、それを見ていく必要が非常にあると思っています。

そして、我々がその取組みを進めていく過程において、1点期待したいのは、やはりエビデンスベースドと言いますか、しっかりと根拠あるいはデータに基づく教育を推進するため、これまでベネッセさんにアドバイザーをお務めいただいていたところもありますし、今後もこういったパートナーシップをしっかりと活用しながら、見える具体策、見える成果を意識しながら取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、伊藤委員、宜しくお願いいたします。

○伊藤委員

伊藤と申します。2人の先生には大変ご尽力いただいております、ありがとうございます。

また先ほど、真田様の読み聞かせの説明部分で思い出したのですが、ベネッセさんは希望があるご家庭に毎年、絵本を配布くださっています。こういったところからも、社会貢献いただいていることを改めて感じた次第です。改めてお礼申し上げます。

私は母親として、3人の子どもを育てながら、仕事をしております。上の子が小学校6年生ですが、9歳頃を境に、すごく変わったなと思っております。9歳、4年生ぐらいまでは基礎力を鍛えてきたところが、10歳、5、6年生となると、いきなり能力を発展させている、子どもの様子を見て、そんな印象を抱いております。

たまたま昨日も、1人の友達が我が家に泊まりに来てくれていまして、その子は、中学受験でなかなか思うような結果が出ず、そのことを相談するため、一晩泊まってくれたのです。その子が「もう学校に行かず、塾だけ行けば受かったのに」と言ったことについて、「でも、協調性だとか、挑戦する力だとか、あと、嫌なことでも続けていく忍耐力とかを、小学校で学んできたじゃない。そのことのほうが、これからは生きる力になるんじゃないの」と子ども同士で話していて、6年生といえど、そういった力が大切だということが分かっているのだなということを感じました。

先ほど申し上げたように、9歳、よく9つまではと言いますが、9歳までは特に、非認知能力がどんどん吸収できるときではないかと感じています。先ほど教育長がおっしゃられたように、幼保小連携と言いますと、どちらかという幼児から小学校へどのようにシフトしていくかが重視されていると思うのですが、小学校でも、非認知能力を鍛えていくプログラムやメソッドに取り組んでいける、そんな学校教育を私たちはつくっていかなければと感じております。

退職された校長先生に幼稚園を回っていただいたとお聞きしましたが、何十年も第一線でやってきた、多くの知見をお持ちの園長先生方に改めてアドバイスするというのは、たとえプロの幼児教育の先生たちでも難しいのではないのかなと思います。

私も3人の子どもをすごく信頼できる幼稚園にお預けして、園長先生とお互い心を開いて話すことができたものですから、ときには、園長先生のお悩みなどを聞く機会もありました。私も中小企業を経営しておりますが、幼稚園も中小企業と同じで、幼児教育云々の悩み以外にも、先生が足りなくて困っていたり、施設の老朽化にどう対策したらよいかであったり、そんな悩みも多い気がします。

ですから、業界の特性が分かった上での支援というものが、巡回される先生方に可能なのでしょうか。今ですと、働き方改革について、幼稚園も保育園も取り組んでいらっしゃ

と思いますが、そういった今直面する問題に対処していかなければならない園長先生方が、そこをクリアする支援ができれば、ひいては安定的な教育の質の向上であったり、健全な施設運営につながっていくのではと思います。

○加納教授

ありがとうございます。子どもたちはすごいですね。びっくりしました。まさに我々の考えそのまま、感動しております。

ご指摘いただいたところ、少し私見になってしまいますが、自分の経験を踏まえながらお話しさせていただきますと、例えば、幼児教育を理解するには、子どもの良さとか、先生がどのように子どもと向き合っているか、言葉とか映像とか本ではなく、やはり現場に自ら立って感じるものが、とても大事だなと思っております。

先ほど、私の失敗談をお話ししましたが、なぜそうなってしまったかと言うと、知らなかったんですね。だから、1年生段階の子どもは、何も知らないゼロの状態なので、大人が教えてあげなければという感覚で、向き合ってしまったのです。

その後、機会あって大学院に進ませていただき、幼児教育や生活科を中心に研究する中で、プランの中にも散りばめられた幼児教育の本質、その大切さを知りました。

また、最初に研究者として勤めた中部学院大学で、当時、附属幼稚園である桐が丘幼稚園の園長をされていたのが、岐阜市で校長までなられた高橋良明先生で、先生はいつも私を幼稚園に誘ってくれました。先生は、義務教育、特別支援教育の知見も持ちながら、幼と小、それぞれの持つべき役割やそのつながりの大切さといったことを理解されていたと同時に、やはり子どもの姿を本当によく捉えておられました。私は、先生に大変感銘を受けて、色々なことを教えていただいたと思っています。

私のような経験を、それこそ小学校、中学校という義務教育に携わる先生、ひょっとしたら民間の人なんかも経験できると良いなと思っております。しかし一方で、働き方改革という世相も相まって、現実には、そのような時間を確保するのは容易ではありません。自分が今、このような立場になって、教育委員会や校長先生にお願いしているのは、全員は無理だとしても、来年度、1年生を担当する先生に2、3月の間の半日も良いから、学区の幼稚園、保育園、こども園の様子を見に行くような機会を作っただけないでしょうか、ということです。何なら、その間の授業を代わりに私がやっても構わないので、そんな話をしながら、その価値をお伝えしています。おかげさまで、岐阜市も勿論そうなの

ですが、そういった取組みが広がりつつありまして、ここで止めないで、子どもの学びをいかに幼児教育から積み上げ、ボトムアップで成長を支えていくという理念を、10年、20年かけて築き上げていくことが大切だと、感じています。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、武藤委員、宜しくお願いいたします。

○武藤委員

教育委員の武藤です。ありがとうございます。今日の話聞いて思ったことについて、2点申し上げます。

まず1点目は、これだけ充実したものをまとめたので、多くの保護者であったり、幼児教育関係者に今後どう伝えていくのか、です。先ほど、教育長がおっしゃった話と重なってしまっていますが、本業の弁護士業務においても、アウトリーチという言葉が、今言われています。待ちの姿勢では本当にニーズのある方に届かない、だからどうやってこちらからそういうところに手を伸ばしていくか。そのためには、自分たちだけではなく、色々とところと連携して、本当にニーズのあるところにサービスを提供していくということが強く意識されるようになってきているわけです。この話もそうで、色々なセミナーや研修に意欲的、積極的に参加される方はそれでよいのですが、そうでない人にどうやって届けるかという観点で、とても大事であると思います。

その観点で、先ほど事務局から説明のあった、幼稚園へ出向いて研修するであったり、幼児教育施設にカウンセラーを派遣するといったことは、非常に良い取り組みだと思います。こちらから出て行って、色々な人に知見を提供して、そこからさらに園に来る保護者、施設に来る保護者、幅広い層にその知見を提供できるということが、非常に良いことだと思います。どういうところへアプローチすれば、効果的なアプローチが図れるかということについて、研究を進めていかなければならないと考えています。

次に2点目、地域との関係が希薄になっているという、真田さんからのお話があったかと思いますが、これは先ほど、川島委員がおっしゃったコミュニティ・スクールの話が、岐阜市においては非常に鍵になるのかな、と私も思っています。先ほど、真田先生の話の中で、保護者の情報源は幼稚園、保育園の先生方を重視しているというお話があったかと思いますが、そうすると、その幼稚園、保育園というのは、やはり幼児教育を広げる重要

な接点になり得るというわけです。

岐阜市は、全て小中学校のコミュニティ・スクールがあります。今後、幼保小の連携が図られる中で、コミュニティ・スクールを連携の場と捉えながら、園と学校、園と地域とのつながりを強くしていくことができれば、地域の中で子育てしていた古き良き時代の慣習というか、そういった文化がまた現代にマッチした形で、新たに展開できる可能性もあるかと思います。ぜひそういうことも、研究していけたらと思います。

先生方に1つ、知見を伺いたくご質問させていただきますが、現在、子どもがスマホであったり、パソコンであったり、IT機器とどう付き合うのか、かなり色々なところで話題になっており、ある県では、条例をつくり時間を規制するといった話も出ています。

私の家も正直例外ではなくて、おそらくどの家庭の親も、放っておくと結構長くなってしまうのでちょっと大丈夫なの、とつい言いたくなることもあるかと思います。意識していればまだ良い方なのかもしれませんが、もう親が無意識に使っているため、子どもにも無意識に、全く何の考えもなく、何となく使わせてしまっている、そういう家庭も結構あるのではと思います。

そうした半面、これからの子どもたちが、IT機器と全く無縁で生きていくことは不可能であって、であればどういったことに留意して向き合っていけばよいのか、またそれについて我々も施策の中で、どういうことを考えていけばいいのか、これらについてご示唆をいただければありがたいと思います。宜しくお願いいたします。

○加納教授

本当にありがとうございます。IT機器の使用に関しては、これも専門性というより私見になるのですが、実を言うと、私はかつて、全国で最初に、携帯を9時以降使わないようにしようという条例ができたまちで、教員をしておりました。これは、教員をやめてからですが、色々と先生方の話を聞いていると、わりかしその条例をつくったことが、子どもにとっても良かったという反応が返ってきて、なぜなら、子どもも9時以降触ってはいけないので、友達に返信できなくても、立派な理由になるんですね。案外、子どもが喜んでいたので、驚きではありました。

一方、これらの機器の使用は、今の時代、もう避けて通れないと思っておりまして、少し外れるかもしれませんが、学校に関わる機会がある場合は、そういったIT機器を必ず、ツールとして扱うことを意識しております。つまり道具です。私たちが高めていかなければ

ばならない、実現したいことは、それらをただ使えばよいのではなく、自分の目的や、やりたいこと、頑張らないといけないこと、それを達成するのに最適なツールとしての確に使いこなすこと、学校教育の中にもまずそう位置づけて活用しましょうと、そう意識してやっております。

また、もう一方で大事にしなければならないのは、勝負ではないと思うのですが、そこに勝るものが、やはり遊びだとか自然体験なんかにあるということ、それこそ大人が一体となって子どもに実感させてあげること、それを踏まえた上での、そういったIT機器の活用であれば、もうこれは避けられないのかな、そんなことを私は感じております。

○真田主任研究員

ベネッセでも、乳幼児の保護者を対象にメディアに関する調査などを行っておりますが、やはり0、1、2歳と子どもの年齢が上がるごとに、スマートフォンなどの利用率は高まっていくという実態がございます。

そうした中で、私どもが保護者の方にお伝えしていることとして、1つ目、時間につきましては、やはり他の生活時間とのバランスを考えたほうがよい、ということをお言います。スマートフォンやテレビ、ビデオを見過ぎることで、寝る時間が遅くなったり、他の遊びができなくなるなど、そうした他の生活時間に影響を与えるような使い方であれば、少し見直す必要があるかもしれません。

また2つ目、付き合い方としては、やはり与えっ放し、見せっ放しにするのではなく、親と一緒に使う。親が少し話しかけながら、例えば、登場人物が何か言ったら、「何でこの子はこうやって思っているんだろうね。」と聞いてみたり、親子の関わりの中でスマートフォンやテレビ、ビデオも使う、そういう使い方が大事ではないかということです。

あとは、やはりデジタルメディアだけではなく、実体験あってこそその子どもの成長、発達であると思っておりますので、そうした豊かな実体験を充実させていくということも、また1つ大事なこととして、お伝えしております。

メディアに関しては、年々というか、日々というか、非常に変化が激しいところでして、私どもも乳幼児の生活、親の生活の実態に合う、どのような付き合い方が良いのか、これからは研究を続けていきたいと思っております。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、足立委員、宜しくお願いいたします。

○足立委員

足立と申します。医師として、内科、小児科医をしております。今、IT機器のお話でしたが、先日、ゲームやスマホ依存についてご講演いただいた先生のお話では、依存症に関して言えば、低年齢など、接するのが早いほど、やはりその罹患率も高くなっているということをおっしゃっていました。ですから、なるべく遅らせるというか、触らせないというのが、手っ取り早い方法になるのですが、もう中学校、高校ぐらいになると、それもなかなか難しいと思います。

改めて、加納先生、真田先生、この幼児教育推進プランという素晴らしいものをつくっていただきまして、ありがとうございました。非認知能力を育てるであったり、遊びの中の学びの大切さ、それから、先ほど伊藤委員もおっしゃっていましたが、その年代にやるべきことと言いますか、3、4歳で生活習慣をちゃんと身につけさせる。5、6歳になったら協調性を身につけさせる。その時期にとにかくやるべきことを、だんだんクリアしていくことで、次に進んでいけるのだと、本当に身をもって感じた次第でございます。

家庭教育の応援ということで、幼児教育セミナーでの高橋先生のご講演を聞かせていただき、本当に感激いたしましたし、その他のご講演も素晴らしかったと伺っております。

さらに、これらを動画配信し、公式チャンネルで見られるようになさっているということも良いと思います。今後も、より多くの方に伝えられるよう、周知に努めていただけたらと思います。

あとは、先ほど教育長がおっしゃったように、届いていないところへどう届けるのかという話で、私が気になっておりますのは、3、4、5歳で私立の幼稚園に通っている子どもが、各年齢で2000人位、認定こども園、公立幼稚園、それから公立保育所が各400人位と拝見するのですが、保護者の就労状況等を見ますと、就労している母親の割合はむしろ増加してきているわけで、保育所に長時間預けるお子さんの割合は、今後も増えてくるだろうと思います。そういった、これまで保育が中心であった子どもたちが、本当にこの幼児教育推進プランの恩恵に与れるよう、なかなか難しいこともあるかと思いますが、小規模の施設も含め、何とかオール岐阜で全ての子どもたちをちゃんと教育していけるよう、いろいろ心を配っていただきたいなと思います。

私自身も、保育園に子どもを預けて働いていたわけですが、まずは面倒を見てもらえる

ということに尽きますが、やはり教育もしてほしいなという本音はございました。ですから、それが両方できるのなら、こんな良いことはないわけで、まさに保育と幼児教育を結びつけていくプランの趣旨にも通じるものだと思いますので、宜しくお願ひしたいと思ひます。ありがとうございました。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、横山委員、宜しくお願ひいたします。

○横山委員

教育委員の横山です。私は、義務教育や大学教育にずっと関わってきた中で、できるだけ早くからしっかり教育することの大切さ、とりわけ幼児教育というものの重要性について身に染みて感じておりましたので、岐阜市が幼児教育を大切にすまちづくりを行う、それは非常に良いことだと思ひています。

今日のテーマは、今後の方向性と更なる充実に向けてということですが、今後の方向性については、私は何ら文句の付けようがない、この方向性だと思ひます。要は、更なる充実に向けて、それが大事であって、色々と書き物は書けますが、それをいかに具現化するか、実質化するかというところが最も大事なことだと思ひています。

それで、プランにありますように、大切にしたい3つのこととして、子供理解、遊びの中の学び、発達の多様性が挙げられています。これは、ごもつともだと思ひます。

遊びの中の学びについては、新しい幼稚園教育要領でも、遊びや生活の中で生きる力の基礎を培うということが、明記されております。大切にしたい3つを実現するための3つのアプローチ、これをどう具現化するかだと思ひますが、岐阜市は、教育立市としてこれまで一貫して、先駆的な取組みを進めてきました。既存の良い施策に更に磨きをかける意味で、この幼児教育を進めてもらいたいと思ひます。

例えば、幼小をつなぐということであれば、先ほど他の委員からお話がありましたが、岐阜市はコミュニティ・スクールが全小中学校区にあり、それが非常に強みであるわけです。しかし、私は教育委員をこれまで3年間務めている中で、それがどう具体的に効果を生んでいるのか、現場を知らないだけかもしれませんが、なかなか実感として持てていません。全国にあるコミュニティ・スクールが、何も均一じゃなくて構わないと思うのです。それぞれが、創意工夫した取組みを展開してもらうことが大事で、そういう意味で、幼稚

園も含めて、まずそれぞれのコミュニティ・スクールが、もしかしたら既にやっているかもしれないませんが、マップを作り、自分たちのコミュニティ・スクールにはこれだけの学校、幼稚園、保育所がある、ではここをどうつなぎ、どう協働していくのか、そう考えていくことで、全国に先駆けて進めてきた、岐阜市のコミュニティ・スクールをさらに進める良いきっかけになるのでは、と思っています。

それから、家庭教育を支援するという点も、岐阜市の場合は、色々と相談機能が充実しています。やはり幼児教育で大事なことは、特にお子さんの発達について不安を持っている保護者が多いと思うので、そういう方が気軽に相談できる、そういうシステムを実質化することが必要だと思っています。

いずれにしても、幼児教育の大事なところは、子どもの良さを伸ばすという視点と、親の不安を解消する、そのために市がどういう施策を充実させていくべきか、そこに知恵を絞っていく必要があると思っています。

オール岐阜という言葉が先ほども出ておりましたが、アンケート調査などで非常に満足度が高い、それは良いのですが、これも既出の意見でどれだけのシェアの中でのことなのかと。厳しいことを言えば、あまりそれに満足してはいけない。やはりオール岐阜という意味は、全ての方々に向けて、どれだけ幼児教育の重要性を浸透できるかということにあるわけで、そういう意味で、普及啓発を一生懸命やっていかなければならないと思っています。

いずれにしても、やはり幼児期からの教育は本当に必要だと思っていますし、それに真正面から取り組む岐阜市に、私は非常に期待したいと思っていますので、ぜひ今後も、少しでも協力できるよう頑張っていきたいと思っています。

ここで、2点質問したいのですが、1点目、幼小をつなぐというところで、スタートカリキュラムというものがありますが、そのスタートカリキュラムの肝というのは、何になるのでしょうかということをお聞きしたいです。

それからもう1点は、遊び込むという言葉が久しぶりに聞きましたが、遊びが重要だという視点は、私も本当に認めるところなのですが、何かしらの仕掛けが必要だと思うので、その部分をもう少し詳しく教えていただければと思います。お願いします。

○加納教授

ありがとうございます。私もスタートカリキュラムを研究対象にしておりますが、肝は、

子ども理解がなされているかどうか、まさにそこに尽きると思います。全国、色々なスタートカリキュラムがありますが、大体、大人ファーストか、子どもファーストのどちらかなのです。つまり、子どもが入学してからの1カ月、先生がいかに困らないで済むためのスタートカリキュラムにしているか、あるいは、入学してからの1カ月、いかに子どもの不安を解消するためのスタートカリキュラムにしているか、です。

私は後者の考え方を推しており、それを色々な地域、学校に発信しておりますが、そこを間違えてしまうと、入学したときに、手はお膝で、前を向いて、びしっと背中をつけている、こういう子を育てる子が正しいと思っているような、そんな視点に終始してしまうこととなります。勿論、良いことであるのは確かで、そこを否定するわけではないのですが、そこに重きを置いたスタートカリキュラムではなく、それこそ、色々仲間づくりなどで不安を持っている子どもたち、今まで目一杯遊び込んできた子どもたち、その皆がさらに4月から、自分らしさや持てる可能性を発揮できるよう、いかにつなげていくか、そう考えています。

そのためには、やはり一番は、幼児期から入学までに至る子どもたちの状況を、先生がいかに把握するかだと思っています。この点についても、私は理念を持ち、一緒になってつくっていくということが研究の信条であります。

○真田主任研究員

私も、ポイントはやはり子ども理解であり、それが全てのベースになっていると思っています。子どもの発達段階をしっかりと捉えたうえで、その子どもの興味、関心、願いを理解し、子どもがやってみたいと思えることが実現できるような環境をつくる。先生がしっかりその子どもの気持ちに寄り添って、温かく、その子がやりたいと思っていることを実現できるように関わるのが大切だと思います。

色々な園の様子を見ていても、やはりそれがベースになっていると実感しておりますので、子ども理解がスタートであると思っています。

○原教育政策参与

ありがとうございました。それでは次に、市長、宜しくお願いいたします。

○柴橋市長

大変関心高く、色々と賛同しながらお聞きさせていただきました。加納先生、真田先生、本当にありがとうございました。

プランの最初に非認知能力として、自己肯定感や主体性を取り入れていただいたこと、本当に感謝申し上げます。認知能力というのは、非認知能力が高まっていけば、おのずとついてくるものであり、認知能力を高めることを一生懸命やっても、それは一定の年数の学びの中ですぐに追いついてしまう領域である一方、非認知能力というのは、まさに三つ子の魂百まで、それをしっかり培っておかないと、後で追いつこうとしても、なかなか埋め切れないところがあるのではと考えたとき、やはり非認知能力を主題に据えていくことに、私も全く同じ思いですし、本当に心強く思います。

先ほどからも議論がありますように、幼稚園、保育園、小学校の先生にいかにかこのプランを理解していただくか、また、まさに今家庭で子どもを育てている保護者の皆さんに、どう伝えていくか、今後も色々とご議論いただき、やはり1人でも多くの方にこのプランに込めた願いが届いてほしいと思っております。

真田先生が先ほどおっしゃった、遊び込むということについては、私も大変なるほどと思うことができました。遊びというのは、色々な遊びがあるわけですが、この遊び込むという中において、例えばどんなカテゴリーの遊びが特に重視されているのか、とても関心があります。例えば、ごっこ遊びや、葉っぱ、どんぐりなどで遊ぶ自然との触れ合い、もしくは1人で何かやることを探求するような遊びなど、色々あると思いますが、何か核となりうる特定のカテゴリーの遊びがあるのか、それとも、何でも良いのでとにかく遊び込むこと自体を重視するものなのか。後ほど、少し教えていただければありがたいなと思っております。

もう一つは、これもご説明にありました、子どもたちの学ぶ力や対話力の一番の出発点は、生活習慣にあるということで、まさに言葉等の認知能力でさえも、スタートのところはやはり生活習慣からつながってきているということが、私にとって1つの気づきであります。

しかし、この考え方は、世の中にはそれほど理解されていないのではないかなと思います。一番の土台は生活習慣だということが、家庭、幼保小ともに本当に理解されれば、例えば、朝しっかり歯みがきしなさいということ一つとっても、虫歯になるから、子どもにみがけ、みがけと言う、ただそれだけのアプローチではなくて、歯みがきをしっかりやる習慣が、子どもの学ぶ力、そして人間としての力につながっていくのだというところまで

落とし込んでいると、親としても、違った見方と気持ちでアプローチできると思うのです。愛する子どもの生きる力のために、苦勞を惜しまず、更に真剣度は増していくわけですし、子どもにも、これはあなたが生きていく力につながっていくんだよということを、理解できるように接していくことができれば、この上ないことだと思います。だから、朝も夜も決まった時間にしっかり起きて寝ることも、生きる力なのだという、こういうことまで言えれば、とても深いアプローチになっていくわけで、ぜひ多くの皆さんに伝えていきたいことだと思います。

そういった意味においても、今後、巡回訪問などを強化して、なかなか外の研修に出られない幼稚園や保育園の先生方に対して、巡回訪問の機会を活用して研修を充実させていくことは、とても意義があることだと思いますし、同時に、いかに子育て世代の皆さんに、様々なチャレンジを通じて、この考え方を伝えていくかも大事なことだと思います。

今日の資料の中にもありましたが、子育てに関する情報を求める先として、幼稚園や保育園の先生への相談があれだけ高順位であることを見れば、そういった先生方から保護者にやはりダイレクトにお伝えしていくことに、とても大きな説得力があると思いますので、そういったことも意識しながら、さらなる幼児教育の推進というところで、今後も先生方のお力添えをいただきながら、頑張ってまいりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

○真田主任研究員

ありがとうございます。特にカテゴリーということは考えていないのですが、一方で、遊びには質があるということを感じています。質というのは、その子どもにとっての遊びの深さとか、あるいは広がりのようなイメージを持っているのですが、泥だんごにしても、積み木やブロックでおうちやお城を作るにしても、その子がどれだけ夢中になって、自分で考えて、工夫して、試行錯誤するか。失敗しながらも、次はこうやってみようとする深さ、また、これができたら、次はもうちょっとこういうことができるかもと別の遊びに広げていくことなどもそうです。そして、おそらく園の先生は、こういった遊びの質を捉えながら、子どもたちが経験を通して多くを学べるようにするため、環境整備をしたり、関わり方を日々考えていらっしゃるのかなと思います。

○加納教授

遊びというものは、本当に多様に広がっておりまして、先ほど市長が例に出した、ごっこ遊びや自然遊びもそうだと思うのですが、それこそ我々大人の遊びとは違って、その質が断然高いものであると感じています。なぜなら、ごっこ遊びをとってみても、あの役になりきれ、夢中になれることはすごいと思いますし、何かをつくりあげたり、達成できたときに見せる喜んだ表情は、大人には真似できない、素晴らしいものだと思います。

私がすごく信条としているのは、いかに心を動かすか、感動体験をするのか、です。そして、そのきっかけは遊びだけでなく、小中高、大学の授業も一緒だと思っています。子どもたちが何かに出会い触れる感覚、物事をやり遂げた感覚、成長に合わせて遊びや学びの内容が変わっても、そういう感覚をいつも傍に持つことができたならば、何歳になっても、学びの価値や良さを大切にできる人になれるのではないのでしょうか。私は、自分が子どもの頃にそれを実感できなかった分、未来の子どもたちにいかにそれを持たせてあげられるか、そんなことを今、意識しております。

○原教育政策参与

皆様、ありがとうございました。本日は、施策に関する様々なご意見のほか、いかに多くの方へこのプランを届けるか、浸透させていくかについての課題提起もいただいたと思います。本日のこれらの貴重なご意見を踏まえながら、来年度、幼児教育の推進に更に力を入れて頑張っていきたいと思っております。

なお、本日の会議録につきましては、後日、ホームページで公開を予定しておりますので、宜しく願いいたします。

これもちまして、会を閉じたいと思っております。本日は、誠にありがとうございました。

(15時00分閉会)